

平成20年度 博士前期課程学位論文要旨

学習効果を高める臨床実習実施のための教育指導方法に関する研究

学位の種類： 修士（作業療法学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学系
学修番号07896604

氏名：佐々木 千寿

(指導教員名：里村 恵子)

【目的】本研究の目的は、学習効果を高める臨床実習実施の教育指導方法を検討するために、1.学生の自己評価による臨床実習に対する満足度と実習指導者の評価による成績評価点との相関を分析する。2.1.で回答した満足に関する理由の構成概念を明らかにする。3.臨床実習を経験した学生が抱く実習の持つ意味の構成概念を明らかにする。

【方法】対象者は都内A専門学校作業療法科学学生平成19年度在籍学生「評価実習」終了学生80名、「臨床実習」終了学生80名であった。質問紙によるアンケート調査は留め置き調査法を用い、また提出者のみを対象に実習結果報告書の閲覧を行い、成績評価点のみを収集した。

分析方法として、満足度はリカート法で測定した選択肢に4段階の変数(1~4点)を与え、成績評価点の2項目について相関分析を行った。「満足に関する理由」や「実習の持つ意味」に関する自由記述は、KJ法を用いカテゴリー分類を行った。各カテゴリーのラベル数の集計と、分析されたカテゴリーを用いて構成概念を作成し、「評価実習」と「臨床実習」を比較した。

調査期間は平成19年9月末~平成20年3月末であった。

【結果と考察】実習領域別の満足度と成績評価点の相関において、中等度の正の相関がみられたのは「評価実習」の精神障害領域(0.69)、「臨床実習」の身体障害領域(0.51)のみで満足度が高いことと成績評価点が高いことは必ずしも一致していないことが示唆された。

「満足に関する理由」の分析から、多彩な実習プログラムを経験すること、実習の課題を達成できること、指導者の姿勢や自己の実習に臨む姿勢が肯定的な内容であるとき満足とを感じる傾向がみられた。学生が満足とを感じる実習を経験するには、指導者の提供する課題や対象者との関わりが適切であることが重要な要因となっていると考えられた。

学生は知識や技術の不足を自覚し、さらに指導者の指導内容や自己の実習に臨む姿勢が否定的なとき不満足とを感じる傾向がみられた。

「実習の持つ意味」について学生は作業療法の実践を学ぶために、自己洞察や自己形成が重要であると考えており、特に治療技術の修得や実習指導者との関係作り、対象者との関わりから理解を深めるためには自己の特性や他者に与える影響などを十分に知っておく必要があると考えていた。

以上より、「満足に関する理由」や「実習のもつ意味」が臨床実習における学生の学びや課題を明確にするということが確認できたので、学内教育指導方法の一つとして、学生の自己洞察や指導者・対象者との関わりから学ぶ学習方法の経験などを積極的に取り入れていく必要性が示唆された。